広報 なりた 新生成田の創造

成田 歴史 玉手箱

●46回●

歴史と伝統文化のまち・成田。市内には、歴史ある文化財が多数あります。

明治14年5月15日の開校式に馬をつなぎとめたヒバの木

「長沼市民の森」入口に建つ三つの記念碑。左から長沼下戻記念碑・干拓頌功之碑・功績記念碑。森（長沼城址）の上には長沼下戻百周年記念碑もある

長沼事件と福澤諭吉

100年後の今も続く福澤家へのお礼伺い

事件の解決に尽力した小川武平（右）と福澤諭吉（左）

長沼地区に住む人々にとって3月29日は特別な日です。かつて長沼村周辺（国道408号線の東側）にあった長沼という大きな沼の漁業権をめぐり争われた長沼事件に終止符が打たれた日です。今から105年前の明治33年のことで、この事件の解決に尽力したのが村の代表であった小川武平（ぶへい）と1万円札の顔としてなじみの深い福澤諭吉でした。

江戸時代、長沼村は幕府に一定の年貢を納めることで沼の占有権を得ていましたが、次第に周辺の集落も沼の共有・入会権を主張し訴訟も起こすようになりました。明治5年、ついに近隣15カ村は印旛県へ沼の国有地化を申請し、県もこれを許可してしまいました。沼の権利を取り上げられた長沼村民は生活に窮乏し、小川武平は村の実情やこれまでの経過を県に説明し権利を回復しようとしましたが果たせませんでした。

その後請願のために千葉に出た武平は、あるとき夜店で福澤諭吉の「学問のすゝめ」を購入。その内容に感動し事件の収拾を諭吉に託そうと上京したのが二人の出会いの始まりでした。諭吉は武平の話を聞くと、嘆願書の草稿作成を手伝ったり、当時の柴原和（やわら）県令（県知事）に書簡を送ったり、武平に手紙を出し教示するなど村民を激励し支援を惜しみませんでした。その結果、28年にわたる争いは解決し、沼は長沼村に払い下げられ所有権は回復したのでした。

事件が解決した翌年の明治34年、諭吉は脳血栓で倒れ帰らぬ人に。諭吉の支援に感謝する村民は、この年からお米や沼で獲れた鰻（うなぎ）や小魚を持って福澤家へのお礼伺いが始まりました。戦前は3月29日を記念日とし村を挙げての祭りが行われました。家々の床の間には諭吉の写真が飾られ、鼓笛隊を先頭に、事件の概要を記した長沼下戻（さげもどし）記念碑（大正7年建立）の前まで行進、そこで村民が万歳三唱し、紅白のもちが配られました。

諭吉と長沼村とのかかわりは長沼事件だけではありません。村人に共同貯金を勧め、さらに教育の普及のために500円を寄付し長沼学校の建設にも協力しました。現在学校跡地には長沼保育園が建ち、1室が「福沢諭吉記念子ども館」として開放され、園庭には長沼学校の開校式に訪れた来賓の馬をつないだという1本のヒバの木が残されています。長沼区ではこうした諭吉の恩義に対し、没後100年を経過した今日でも役員が毎年3回福澤家を訪れています。

諭吉の直系の曾孫にあたる福澤範一郎さん（右から2人目）宅を訪れた長沼区の役員

編集後記

今回の歴史玉手箱は長沼区と福澤諭吉にまつわる話題。福澤宗家の当主である範一郎さんのご自宅は、都内ではなく川崎市郊外の閑静な住宅地にあります。「日本野鳥の会」学術顧問を務める範一郎さん、庭半分（宅地１区画分）を鳥たちのために自然のままの状態に。飛来する鳥の声を聞くだけで種類が分かるそうです。福澤家を訪れる長沼区役員の間には「鳥の話題に対応できるように」という暗黙の引継ぎも。お礼伺い経験者として、つい補足してしまいました。

広報なりたは再生紙（古紙配合率70%・白色度85%）を使用しています。